

霧と雲 - 私が見た違う京都

劉 楽楽

今の中国では私たちが生活するうえで、利便性が重要視されます。言い換えれば、利便性を求めたが為に、景観や文化を損なうことは仕方のないことであり、生活様式の発展、社会の発展を考えれば、それは受け入れなければならないと思っています。

父は、済南駅のすぐそばにある鉄道関係の会社へ勤めていました。私が病気で幼稚園へ行くことが出来ない日は、父の職場へ連れて行かれていました。父の会社から済南駅が一望できます。ドイツ人デザイナーに設計され、1910年に作られた当時中国唯一のゴシック建築様式であった駅の建築的価値なんて、まったく理解できませんでしたが、あの綺麗な建物が好きでした。冬の午後に二階の窓から入る日差しはキラキラとしており、床に様々な光や模様映っていたあの光景は、この年齢になった今も鮮明に覚えています。

成長していくと共に、父の職場へ行く機会も少なくなり、私の中であの済南駅は記憶から薄れていきました。1992年ニュースで済南駅が取り壊され、新しく駅舎が出来ることを知りました。思い出の駅舎が取り壊されてしまうことに残念な気持ちは多少あるものの、それ以上に新しくなることで駅周辺の利便性が高くなるだけでなく、乗り入れられる電車の本数も格段に増えるため、新しい駅舎の造営は私自身においても歓迎すべきことでした。約3年の年月を経て公開された新しい駅舎は、利便性に富んだ現代的なものでしたが、機械的であり、そこには人々の生活を感じる事が出来ないような雰囲気がありました。当時、中国は凄まじいスピードで発展しており、新しいものを作るには古きものを取り壊されなければならないと、そこに違和感を覚えながらも、これこそが発展であると自らを言い聞かせました。

高校卒業後に名古屋に留学いたしました。その留学中に、留学生向けの観光旅行に参加し、初めて京都を訪れました。金閣寺、銀閣寺、八坂神社などの名所を一日で回り、観光地として整備され、実生活とはかけ離れた世界観を堪能しました。それはディズニーランドなどのテーマパークに代表されるような造り込まれた世界観のようにも思えるものでしたので、古跡や、景観などは都市の飾りに過ぎず、観光向けのものになるだけです。古いものは「見るもの」で、生活に役立つのは新しいものだと思いを確信しました。

留学を終え、中国に帰り、大学で日本語を教える仕事を始めました。2016年に研究員として来日する機会があり、研究活動の一環として月に複数回、銀閣寺の近くへと通いました。当初、私の目に映るのは、やはり最初に来日した際と同様に観光地としての京都の街並みでした。現代からタイムスリップしたかのようで、歴史と文化に包まれた世界観は変わることがなく、「住む所」ではなく「見る所」という印象は拭えませんでした。その後、訪れる回数が増えるにしたがって、様相は一変していきます。確かに歴史と文化に包まれた世界観でありながら、そこに住

んでいる人たちの生活感がきちんと融合していることに気付きました。それは生活の要ともいえる交通網においても、景観を損なうことなく、かつ、利便性を失うこともなく、一体化されたものとなっているのです。

それから昔と今がうまく融合している京都に興味を持ち、日本の美しさを存分に表現できるのはここしかないと思うようになりました。春の桜、秋の紅葉、石畳の道に歩く着物の女の子、京都の一木一草にも歴史と人々の生活の形跡が凝縮していることに気づきました。

皆さんは「雲」と「霧」の違いを考えたことがありますか。言葉自体はまったく違うものの、気象学の中では、どちらも「微小な浮遊水滴」として扱われています。つまりは、どちらも同じモノとなります。山の上を見て「雲がかかっている」と言います。その山を登っていった時には「雲の中に入った」とはいわず、「霧がすごい」と言います。

「雲」と「霧」の例のように立場が変わることによって、見え方が変わるということが多々存在します。初めて、または極稀に京都へ行った際には、観光地としての印象であった京都ですが、その回数が増えるに従い、またそこに住む人からのインタビューなどを拝聴することで古き良きモノと、利便性に富んだ新しいモノとが上手く融合された空間であることを実感することができました。済南駅が新しくなった時に感じた違和感は、新旧とは対義語であり、決して融合するものではない。また、古きモノに代表される文化などは、新しきモノに表される利便性などに淘汰されるものであるという刷り込みに対し、どこかで融合できるのではないかという私の希望によるものであったと思います。景観や文化を損なうことは、発展のために必要なことであり、受け入れなければならないという私の考えを一変させてくれました。前を見て進んでばかりでは目標を見失うことがあり、しっかりと来た道を踏まえれば、向かうべき道がより明確に見えてくるでしょう。新と旧は対照的ではなく、うまく融合できるのではないかという希望を確信へと昇華させてくれたのが京都です。

現在、私は日本語教育の領域で更なる研鑽をするため、博士学位を目指し、二度目の日本留学をしています。一人の日本語教師として、また文化学習を取り入れた教授法を研究する研究者として、融合されたモノを継承していく人材の育成に携われる道を追求して行きたいと思っています。